

紀要『人文・自然研究』第19号

剥ぎ取られた生を生きて：
Henry James の *The Spoils of Poynton* にみる人と物の関係性について

加茂秀隆



2025年3月25日発行

一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究 第19号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 19



2025年3月25日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中2-1

組版：精興社

剥ぎ取られた生を生きて：

Henry James の *The Spoils of Poynton* にみる人と物の関係性について

加茂秀隆

1. 序

Henry James が描く人と「物」との関係とは如何なるものか、これが本稿の主題である。この問いは彼の生涯に渡る。初期の“The Ghostly Rental”では家屋敷が、“The Romance of Certain Old Clothes”では形見の衣服が、“The Altar of the Dead”では祭壇に捧げられる蠟燭が、*The Wings of the Dove*（以下、*WoD*）では真珠や比喻ではあるが「鳩の翼」が、*The Golden Bowl*（以下、*GB*）では黄金の盃が、物語において象徴的な役割を果たしている。晩年、自身で編集した作品集、ニュー・ヨーク版の序文で、大量生産品の世にあって骨董品は「物狂い」という時代の危機の核心部だと彼は語る（ix）。Jean-Christophe Agnew を引きながら Victoria Coulson は「近代の日常品の文化の表象の論理を、ジェームズのテキストは表現している」と言う（321）。「物」は James の時代への意識の中心にあった。

人と物との関係性が主題である彼の作品の一つである、遺産としての骨董品の相続をめぐる物語である *The Spoils of Poynton*（以下、*SoP*）を、本稿は論ずる。

同作品の人と物との関係を主たる論点とした先行批評を概観すると、二つの傾向があるようだ。一つは、人と物が相互を籓としていた関係が分裂、遊離した結果の、観念的な、消費社会の物神崇拜や帝国主義を読む。他方は対極的に、現象、言わば登場人物の身体性に着目した、人と物の関係の現象学的読解、ないし更には、物に自律的生命を認めるある種の実在論的立場からの読解である。

前者の場合、人間生活という実態からの物の遊離と一種の抽象化を、Agnew は James のテキストに読み（82-84）、更に Bill Brown は端的に同作を “a novel about things, but without things”（150）と言う。これらが意味するのは、物のそれ自体からの遊離と抽象化、物の記号化であり、Coulson によれば Marx のフェティシズム論等から、それは理解しうる（321）。これは総じて Mrs. Gereth に注目した時の読解であろう。

対する後者の場合、同作品の先行批評は、財産相続権を男性のみに限定する 19 世紀英国の男権社会の犠牲者と Mrs. Gereth を解釈し、同時代の父権的文化法制度や進展する商業社会から否定された女性性を、そして、その身体性に根付く生活のシンボルとして Poynton 邸ないし Ricks 邸を、総じて語っている（Wynne）。身体性に根ざした物の在り方という言わば現象学的解釈を、夫人及び Fleda と Poynton の蒐集品との関係性に Nozaki Naoyuki が施す時、その関係性は例えば Fleda の繊細な感性（ゆえに彼女は功利的な生活力・経済力に乏しい（66-67））、換言すれば、彼女の身体性に根付くと言い、それは物との相互作用（“reciprocity”）に規定され、また、それが人間と物の関係を成立させる言う（69）。Coulson もまた、父権社会及び消費社会に否定された、物と人との身体性を基盤とした関係を認め、物の実体性の無さをその抽象化ではなく、身体性の連続に求め、「ポイントンとは、経験の連続性という全体論的な環境（“an [sic] holistic environment”）である」と言う（327）。これは総じて Fleda に注目した読解で顕著である。Mrs. Gereth



と Fleda という、男性社会からの抑圧と優れた審美眼という共通点がありながらも、この二人への着目の選択次第で、同作をめぐる議論はこれらに大別されるようだ。

作品のプロット的一端でもある、この差異の由来は何か。本稿はこれら先行批評の妥当性を別視点から改めて確認しつつ、その理由を探る。本稿の概要は次の通りである。先ず、人と物、主体と客体とが有機的統合した世界を理想としながらも、人間はそうした世界にはもはや生きてはいないという彼の時代認識を確認する。その結果である、物質に投影された人間の観念性の肥大化への、James の眼差しを追う。次に、こうした物への彼の認識にも直接的に影響したと思われる思想の整理、及び、その思想の時代状況による変容を見る。身体の延長たる道具として生きるはずの工芸品が、主客の関係の崩壊した世界で、蒐集品として観念的・霊的美の次元を、同時に有機的生を剥がれアレゴリー化した物として現象の次元を生きる様を追う。最後に、他方、これらとは異質な、身体が崩壊した後の身体性とでも言える物と主体の関係を、本稿は Ricks 邸に見る。

2. 剥ぎ取られた「物質的客我」

Mrs. Gereth が相続権を有さない蒐集品は、彼女の分身である。物の所有が自我と結合する様を Collin Meissner は James 作品の中に指摘する。

Pure exchange economies, which is what James believed America had become, rely, according to Simmel, exclusively on money to “tie being and owning together,” since “ownership” provides an “opportunity for the Ego to find its expression in objects.” (274)

William James は *The Principles of Psychology* において、人間の「自我」(“Self”)を「主我」(“I”)と「客我」(“me”)に分類する。主我は René Descartes の言うコギトに相当する。そして、客我は「物質的客我」(“The material Self”)、「社会的客我」(“The social Self”)、「精神的客我」(“The spiritual Self”)に各々、分類される。「精神的客我」は宗教、倫理等の精神、「社会的客我」は家族・友人や社会的地位や儀礼、名誉等の社会関係である。「物質的客我」とは身体に始まって、身の回りの日常品から芸術作品や記念品、財産に至る物である (291-332)。この場合、物は身体の延長である。人格と不可分の、この物と人間の関係は精神のエコシステムとも呼びうる。*SoP* にそれはよく表れている。

There isn't one of them I don't know and love—yes, as one remembers and cherishes the happiest moments of one's life. Blindfold, in the dark, with the brush of a finger, I could tell one from another. They're living things to me; they know me, they return the touch of my hand. (31)

夫人にとってこの「物質的客我」に対応するのが、彼女が心血を注いで蒐集し、彼女の美的感性が投影された骨董品である。彼女は自我の一部であるこの蒐集品の譲渡を拒むが、相続は出来ない。

物をめぐる物語は自我をめぐる物語でもある。自我を構成する物質的客我たる物が有機的に統合されていれば、自我自体もまたその秩序を保ちうるだろう。Fleda や Mrs. Gereth と蒐集品という「物質的客我」との有機的主客統一の次元を James は描く。だが、





そうした美しい統合の円環の下に我々、人間はもはや生きてはないという認識をも彼は持っていたのではないか。同作品を特徴の一つが、自我の延長である物が蒐集品である点であろう。同作品は、“The House Beautiful”を原題として執筆が開始され、雑誌連載当初、*The Old Things*と題されていた（山口 85）。それを James は *The Spoils of Poynton* と改題する。「動物の皮を剥ぐ」という意が語源の“spoil”という語の選択は、意識的である。「物質的客我」である物をめぐる当時の状況への James の認識がそこに垣間見え、これが興味深いクリティカル・ポイントたりうるように思われる。本来、存在していた場からスポイルされた物（戦利品、強奪品）に投影された主客の関係性は、その投影対象がデラシネ（“déraciné”）であるがゆえに不安定で亀裂が生じ、更にしばしば決定的に崩壊している。

3. 物への投影、ドン・キホーテの行為

この亀裂の帰結の一端を同作品は描く。それは Mrs. Gereth の自我の肥大化である。彼の物語の登場人物達は、その理想の高低に関わらず、物に投影された自身の自我を、しばしば妄想と呼びうるまでに肥大化させてゆく。同作品の Mrs. Gereth をはじめ、*The Portrait of a Lady*（以下、*PoL*）における欧州の美術や Isabel Archer の富に対する Gilbert Osmond や M. Merle、*WoD*における Milly Theale の富（例えば、真珠）に対する Merton Densher や Kate Cory、“The Jolly Corner”におけるニュー・ヨークの不動産に自身の仮の人生を投影する Spencer Brydon 等が例に挙げられる。これらは彼等に自身の何らかの物的欠損ないし不完全性を意識させ、その回復への念を生じさせる。それが彼等の自我となる。だが、その欠損ないし不完全性ゆえ、その自我は必然的に不安定となる。骨董品に投射された夫人の美の完全性への希求と、それにより確立されるはずの彼女の自我が、本来の有機的統合の崩壊しスポイルされた物に投影される時、そのスポイルはそれに抗う自我の統合への衝動因となる⁽¹⁾。そして、スポイルされた物は、本来の場から収奪された後の、死後の生を彼女の理念の中で生きる事となる（31）。それは彼女の夢想であり、自我の肥大化である。だがやがて、その理念が妄念に転落する。

こうした衝動に駆られた彼女は、自身の自我の延長である蒐集品を奪われそうになると、その相続を認めない英国男性社会の資本主義産業の産物であり、骨董品の対極にある大量生産の日常品に対して決然たる闘争心を抱く。

“... The world is full of cheap gimcracks, in this awful age, and they're thrust in at one at every turn. They'd be thrust in here, on top of my treasures, my own. Who would save them for me—I ask you who would?” and she turned again to Fleda with a dry, strained smile. Her handsome, high-nosed, excited face might have been that of *Don Quixote* tilting at a windmill. (31, emphasis added)

反時代的な夫人のこの態度が、ここで“Don Quixote”に喩えられているのは興味深い。敬虔なるカソリック教徒、フェリペ二世が統治するスペインの無敵艦隊が、プロテスタント

(1) ここで物は二重にスポイルされる。第一に、本来、在った場所からの移動、第二にその後、コレクションとして再び有機的統合を得ても、それがまたも解体されようとしているからだ。夫人が蒐集品の一部を持ち去ることで損なわれた Poynton を、四肢を挽がれた生物に Fleda は喩える（78）。

のエリザベス一世が統治する、大英帝国の前進であるイングランドのドレイク船長率いる海賊海軍に敗れた後、Miguel de Cervantes により書かれたのが *Don Quixote* である。彼はオスマン・トルコ帝国とのレバントの海戦で負傷し、その後、生活苦の中、無敵艦隊の食料調達係の職を得るも、アルマダの海戦で無敵艦隊が撃破されたため職を失う。当時のスペインは、カソリックの大義名分の下、世界制覇を夢見て戦争に明け暮れた挙句、その黄金期に陰りが見え始めた時代にあった。その時代に生きた Cervantes が生み出した、時代遅れの騎士道精神に憧れるパラノイア騎士、*Don Quixote* に Mrs. Gereth は比される。

これはかなり含蓄に富むと思える。この物語のキー・アイテムは、カソリックのスペイン帝国黄金時代を伝える「マルタの十字架」(“the Maltese cross”)である。それは蒐集品の中でも至高の一品とされ、夫人の息子であり恋愛対象でもある Owen Gereth から Fleda へと贈られる予定だったが、最後に Poynton 邸もろとも炎上する。

“And even the Maltese cross!” That description, though technically incorrect, had always been applied, at Poynton, to a small but marvelous crucifix of ivory, a masterpiece of delicacy, of expression, and of the great Spanish period.... (73-74)

“Maltese” (「マルタ」) とは、十字軍時代、聖地巡礼のために設立され、カソリックには慈善事業を施しながらも今日の目から見ればムスリムに対して略奪行為を行い、レバントの海戦ではスペイン配下で戦った、マルタ騎士団を指すものと思われる。その “the Maltese cross” を大英帝国の夫人が手にし、そして彼女が認めた審美眼の持ち主、Fleda に渡らんとするも果たせず直前に炎上するという設定に、政治、経済、宗教をめぐる James の隠された歴史認識が見える。美の聖戦を挑む *Don Quixote*、Mrs. Gereth には、新大陸をも支配した黄金期スペインの王、敬虔なるカソリック教徒、フェリペ二世の観念性が一面、重なりうる。対して、そのスペインを破った海賊海軍の子孫が産業革命を起こし資本主義を発展させ、世界の工場として大量生産工業品で世を埋め尽くし、原材料の調達地と商品売りつける市場として全世界に植民地を領有する。こうした世界史に対し決然と *Don Quixote* 的決闘を挑む Mrs. Gereth は、資本主義によって富を収奪する大英帝国の力の下での、芸術的価値ある骨董品の蒐集という設定を考慮すれば、皮肉なことに彼女の対決相手の戯画にも同時になりうる。確かに、彼女には同情心を以って James は描いているが。

宗教、美、収奪、資本、帝国、これら人間精神の産物が投影された物は、言わば物質的客我である。帝国の自我を構成する物質的客我が植民地であり、資本主義のそれは蓄積された富である。蒐集品という物質的客我をめぐる物語である同作において、植民地への直接的言及はないものの、物は世界の隠喩だと James が言う時、夫人の世界中の骨董品の蒐集とその美への態度は、帝国や資本の膨張主義からさほど遠くない位置にあると言える。

... a hope of which Fleda at least could see the absurdity and which gave the measure of the poor lady's strange, almost maniacal disposition to thrust in everywhere the question of “things,” to read all behavior in the light of some fancied relation to them. “Things” were of course the sum of the world; only, for Mrs. Gereth, the sum of the world was rare French furniture and Oriental china [*sic*]. (24)

.....



What had her whole life been but an effort toward completeness and perfection?
(50)

John Carlos Rowe は夫人のスポイル、蒐集品は、皮肉なことに彼女が闘っているはずの帝国主義下の英国の家長制の権威と富を誇示するための蒐集品とも同じだと言う (101)。

彼女の蒐集品への態度は、剰余価値が増殖しうる限りでの資本主義の自己拡大への希求、倦むことない領土や植民地の拡張政策という帝国の自我の如くである。だが、過熱した景気は恐慌に到り、帝国の拡大は戦争に到る。James が生きた時代、大英帝国はその繁栄にも徐々に陰りが見え、民族主義の台頭や当時の新興国ドイツとの競争により疲弊しやがて没落してゆく。かつて旧大陸の植民地であった新大陸アメリカ出身の James は、やがて覇権が自身の母国、アメリカへと移行行く事に敏感であったのは周知の通りだ。PoL の米国人銀行家 Touchett 家が英国の屋敷を蘇生させる様や (3)、WoD の Milly、GB では勃興するアメリカの資産家 Adam Verver の富によって旧大陸から新大陸へともたらされる美術品等 (188-200) が、例に挙がる。レパントの海戦を戦い、その後、Don Quixote を書く Cervantes にせよ、カソリックの理想の下、陽の沈むことなき帝国の建設の野望に燃え無敵艦隊を出撃させたフェリペ二世にせよ、近代の粗悪な工業製品と戦う Mrs. Gereth にせよ、そして彼女が戦いを挑んでいる大英帝国とその資本主義にせよ、何らかの理念性に自己を投影しそれに固執し、やがて滅ぶ⁽²⁾。

夫人の試みも、その試みの道具であり、また彼女が認めた審美眼の持ち主である Fleda が (つまり Fleda も人であっても夫人にとっては、彼女の「物質的客我」でも一面あるのだが)、Owen との結婚を逡巡して結局は失敗し、更に骨董品も火事で消失する。理念が投射された物理的存在が理念を支えきれない時、理念は破綻する。同作序文でも、無私と情熱の中にある狂気のコア部に芸術のエコノミー (“the sublime economy of art”) を James は位置付けるが (vi)、裏返せば、彼は芸術の背後に (そこにエコノミーが存在するにせよ) 狂気を認識していたと言える。

人間が理想の内に密かに宿す妄念が、理念や理想、あるいは願望と現実との間の断裂を引き起こす様に、James はしばしば関心を寄せる。“The Romance of Certain Old Clothes”、Daisy Miller や The Turn of the Screw 等が例として挙がる。だが、その虚構が破綻した時、物理的現実が露となる。物語の背景にある帝国主義や資本主義による物の増大に促され、夫人の「物質的客我」である蒐集品とその美の追求は夫人の自我の肥大化に帰結する。

4. James が見る「人」と「物」の関係性の思想的背景

こうした主客関係の変容、主を従への、そして客を主への転倒の結果、夫人の骨董品の美への理念は妄念となる。それを James は Don Quixote に喩えるが、Don Quixote のコスモロジーは人と物の関係をめぐる James の世界観の一端を、そのアナロジカルな類似性により示唆する。Michel Foucault によれば、Don Quixote はルネサンス時代と古典主義時代との狭間に在った人間の寓話である。ルネサンス期では、能記の物的特徴と所記は

(2) マルクス主義及び精神分析学を援用し、Mrs. Gereth の骨董品への執着を不在の女性のフェリスの代替としてのフェティシズムと、Fotios Sarris は解釈する。この想像界における鏡像への同一化は物質的客我と解しうるが、マルクスの言う資本の自己増殖と並行して、その客我は観念的に、無際限に膨張するのだ。



その類似性によって多様に結合し、意味が無限定的に連鎖していた。だが古典主義期、記号は透明な媒体となる。騎士道文学を読みふけりその理想に憧れる彼はルネサンスの知に生きており、例えば風車をその類似性から怪物と錯覚して闘いを挑むが、記号の物質面の等閑視こそが理性とする古典主義の知の下では、こうした言葉と物、空想と現実の交錯は狂気とされる (Foucault 32-91)。

James が引くこの人と物をめぐる寓話に接する時、彼の父、Henry James Sr. が研究していた Emmanuel Swedenborg の「照応」(“Correspondence”) が想起される。この思想はこのルネサンス期のエピステーメに類似し、更に James の作品にもその影を落とす。この思想は、霊魂や観念と肉体や物質とが互いに呼応しているとする。最高次元の宇宙の霊魂から最下層の物質に到るまで宇宙を階層化して把握し、霊魂と物質とが照応しているとされ (Swedenborg 70)、例えば、「暖かい心」と言う時、暖かいという物理現象と心という精神現象は互いに呼応しているとされる。精神と物質とのこの関係は、所記と能記との不即不離での記号の構成にもよく現れている。蒐集品の中でも逸品である “the Maltese cross” を受け取ってほしいという Owen から Fleda への手紙をめぐる次の件にも、Swedenborg の人間精神と物質との “Correspondence” の思想の名残を認めうる。

She lived with her letter, before any chance came, a month, and even after a month it had mysteries for her that she couldn't meet. What did it mean, what did it represent, to what did it *correspond* in his imagination or his soul? What was behind it, what was beyond it, what was, in the deepest depth, within it? (259, emphasis added) ⁽³⁾

このコスモロジーは (新) プラトン主義を源流とする。万物照応を連続的に把握すれば新プラトン主義に近く、物資と精神を峻別し前者に対する後者の優位性を説けばプラトン主義になると理解される。

これを踏まえて *SoP* を読む時、その人と物の関係性に別角度から光を当てうる。美を軸に骨董品と人間精神とを有機的に照応させる Mrs. Gereth は、粗悪な量産品と対峙する。だが、時代遅れの騎士道精神に囚われた Don Quixote よろしく、彼女は自我の投影対象の膨張に吞まれ自我を肥大化させる。こうした夫人のある種の唯美主義的態度の帰結である彼女の自我の肥大化は、Swedenborg の思想を汎神論ではないと規定したプラトン主義的色彩の濃い Henry Sr. による解釈に一脈、通じ、James によるアイロニカルなその解釈のネガとも解しうるかもしれない。Henry Sr. の所説を以下に確認する。

The correction which Swedenborg brings to this pernicious idealistic bent of the

(3) James の作品への Swedenborg の影響は、時折、指摘される。近年では、Andrew Taylor、Kristin Boudreau や James Duban が単著を記している。また、Beverly Haviland は Henry Sr. の Swedenborg 神話研究のアレゴリーとして *PoL* の読解を試みる。だが、これらの思想的影響を念頭に置いた読解の試みは James 研究の世界では主流ではない。James 研究に長きに渡り影響力を持った Leon Edel による、その影響の指摘への反駁、及び James 自身によるその影響の否定に、その一因を求めうだろうと Haviland は言う (228)。確かに、小説家として小説論や小説家論を多数、執筆し、小説という芸術ジャンルに極めて意識的であった James 自身も、形而上学的思索や敷衍化された抽象論を積極的に認めたがらない (*Notes of a Son and Brothers* 168-69)。この結果なのか、父や超絶主義者からの影響関係を主題とした論考には *SoP* への言及はなく、他方、同小説を論じたもの、例えば、Deborah Wynne、Eric Savoy 等々には、こうした影響の考察はその論考に組み入れられてはいない。



mind consists in the altogether novel light he sheds upon the constitution of consciousness, and particularly upon the *fundamental discrimination* which that constitution announces between the phenomenal identity of things and their real individuality; between the subjective or merely quantifying element in existence, and its objective or properly qualifying one. The old philosophy was blind to this sharp discrimination in the constitution of existence. It regarded existence, not as a composite, but as a simple quantity, and consequently sank the spiritual element in things in their natural element—sank what gives them individuality, life, soul, in what gives them identity, existence, body.... (Henry Sr. 8, emphasis added)

Poynton の完全なる美を追求する Mrs. Gereth の唯美主義、あるいは自我の延長である人間や物（殊に、物語の終局における、マルタの十字架を含めた Poynton の蒐集品の焼失）との離別、対する残された人間（夫人と Fleda）、物語のこの構図の結末は、精神と物質の間にある “fundamental discrimination” に向けられた、リアリズム作家、James のアイロニカルな視線なのかもしれない⁽⁴⁾。

物資と精神の照応という一元論と、その照応関係の崩壊と理念の肥大化という二元論、これらの折衷と摩擦をこの物語はプロットの一部にしている。Mrs. Gereth が自身の理念性のうちに蒐集品に生を吹き込む様は、主体と物が有機的に交差するルネサンス期を彷彿とさせる。実際、ルネサンス期のエピステーメに背景には、照応思想の源流である新プラトン主義のその当時の流行の影響が指摘される（Kristeller）。だが、Foucault によれば、*Don Quixote* が書かれた時代、言葉と物の交錯と乖離はアレゴリーの様相を帯びる（63）。この照応するコスモロジーの崩壊を生きる Don Quixote を James が引くのは、西洋思想史の文脈から眺めると必然的に見える。

やがて、その後の古典期の透明な表象空間において、等価関係の設定を可能にする記号としての貨幣によって、物質の交換は正当化される（Foucault 177-225）。そして、その交換の過程において自然の有機的統一は解体され、Poynton の工芸品の美的価値を理解出来ない Mona の蒐集品への執着のような、マルクス主義が問題とする労働の物象化の帰結

(4) 蒐集品に対する態度の複雑な側面には、留意すべきである。William の言う「物質的客我」に人間が捕らわれる様のみを、同作で James は描いているのではない。小説を芸術たらしめんとした James は、単なるアイデンティティを保証する道具、つまり「物質的客我」としてのみ蒐集品を描いているのではない。「精神的客我」である蒐集品の美そのものへの関心、近代美学の言う「美的判断における無関心性」を、James は Mrs. Gereth や Fleda の中に描いているからだ。因みに、「美的判断における無関心性」とは美以外の一切の要素（Kant にあっては普遍的道德も含まれる）に対する無関心である。

Fleda は自身の愛を Poynton の骨董品に注ぎながらも、それらは誰の所有物ではないという（234-35）。こうした彼女の態度は、William の言う「精神的客我」の範疇に含まれる側面があると思われる。Nietzsche を引きながら、松浦恵美は彼女達の美そのものへの探求心を語る（68-70）。また山口志のぶは、欧州の文化的洗練の背後にある James が見た道德的退廃には唯美主義も含まれるのではと述べるものの、この小説に唯美主義的退廃を説くのは Fleda の道德心を根拠に慎重である（91-93）。

Mrs. Gereth の蒐集品への態度も、無私と利己との間にありアンビバレントなものだ。美という理念は感性的次元に依拠し、芸術は常に自己の理念の受容体である物質を必要とする。ゆえに、骨董品は夫人の「物質的客我」と「精神的客我」の両方の性質を帯びる。こうした多面的且つ重層的な人物造形は James らしいと評価でき、形而上学的思考に不満を示したリアリズム小説家（*Notes of a Son and Brothers* 168-69）である彼らしさが表れている。だが、彼女達と骨董品との関係を、「物質的客我」、「精神的客我」のいずれの範疇から補足するにせよ、その理念を支える物理的現実の離反に理念性は遭遇しその理想は破綻する。その時、理念は妄念の烙印を押される。



である物神崇拜が生まれる。経済に翻弄される人間を、James は幾度も描く。同時に、その有機性を剥ぎ取られた物は、それに向けられる人間の眼差しの内に新たな記号の配列を付され、物であるのと同時に幽霊的な、死後の生を生きる (SoP 31)。こうして、記号と物とが恣意的な結合したアレゴリー的存在に物はなる⁽⁵⁾。

5. Ricks の侘び住まい

一般的に、James 小説はリアリズム文学の範疇に入れられる。だが、殊に初期作品には Nathaniel Hawthorne のロマンスの影響が顕著にあり、James は決してアレゴリーを用いた創作手法を全面的には支持しないものの (Hawthorne 62-63)、そのアレゴリー的側面をも受け継ぐ。結果、ロマンスとリアリズム、両方の要素が彼の作品の中に時に混在し、彼が好む身近な物と幽霊との結合が、そのロマンスの名残と見做しうる。彼は「良い幽霊物語は多くの点で日常品 (“the common objects of life”) と結び付かねばならない」(Literary Criticism 1: 742) と言う。アレゴリーは生の残滓たる遺品であればすべからく生のない蛻の殻であり、在りし日の面影を亡霊として召喚する。

語られるべきは、同様に霊的でも、一面、観念的な美の次元の Poynton とは対照的な、日常の傍らに憑く亡霊的なものが同作で描かれている点だ。即ち、Poynton を失った夫人が Fleda と居住することになる Ricks 邸の侘びた佇まいである。二人はそこで侘しく生きたおばを偲ぶ。

The house was crowded with objects of which the aggregation somehow made a thinness and the futility a grace; things that told her they had been gathered as slowly and as lovingly as the golden flowers of Poynton. She too, for a home, could have lived with them: they made her fond of the old maiden-aunt.... Fleda was moved, after all, to some secret surprise at the pretensions of a shipwrecked woman who could hold such an asylum cheap. The more she looked about the surer she felt of the character of the maiden-aunt, the sense of whose dim presence urged her to pacification.... The poor lady had had some tender little story; she had been sensitive and ignorant and exquisite: that too was a sort of origin, a sort of atmosphere for

(5) ルネサンス期に続くバロック期を論じた Benjamin のアレゴリー論 (*The Origin of German Tragic Drama*) の背景には、ユダヤ神学に加えドイツ・ロマン主義もある (“The Concept of Criticism in German Romanticism”)。さて、James の照応思想には、彼の父のみならず、その親友であり同じく Swedenborg の思想にも影響された Emerson の存在も背景にあるのではないか。留意すべきは、一元論的・有機体論的・汎神論的な Emerson の思想 (*Essays* 174-75) は、プラトン主義的な父の思想よりも James に近い面がある。本稿が先に引用した SoP の 31 項の件にある、無機物である骨董品に生命を見る汎神論的描写が、その例である。そして Emerson の思想は新プラトン主義的色彩が濃い。更に Emerson にはドイツ・ロマン主義の影響もあり、この点において Benjamin と James は交錯しうるはずだ。このルネサンスの有機体論的コスモロジーが歴史の変転の中での瓦解した結果、物はアレゴリーと化す。

人と物との有機的統合による象徴的照応の下、物がシンボルとしてコスモロジカルに意味を発する世界と、物が死せる自然として多様な意味を帯びるアレゴリーと化した世界、そのいずれにも James は視線を向けているように思われる。「物狂い」という大量生産品の時代の危機の核心部にある骨董品 (ix) は、アレゴリーの時代のシンボルなのだろうか。町田みどりは、「もの」と人間の相互作用によるその身体性の有機的拡張という、言わば現象学的解釈に加え、更に James は「もの」の自律性、その独自の生命を認識していたとも言 (197-201)。だが、物語の終局での、多様な解釈を生む Poynton の炎上は、“spoil” という題名とも相まってその不可能性をも暗示すると言う (202-05)。



relics and rarities, though different from the sorts most prized at Poynton. (54-55)

おばを偲び共感する二人は、この後 Poynton にない霊の気配を Ricks 邸で感じる。

“Ah, the little melancholy, tender, tell-tale things: how can they not speak to you and find a way to your heart? It's *not* the great chorus of Poynton.... This is a voice so gentle, so human, so feminine—a faint, far-away voice with the little quaver of a heart-break.... ”...

“Does it happen to be in your power to give it a name?” ...

“I can give it a dozen. It's a kind of fourth dimension. It's a presence, a perfume, a touch. It's a soul, a story, a life. There's ever so much more here than you and I. We're in fact just three!”

“Oh, if you count the ghosts—!”

“Of course I count the ghosts, confound you! It seems to me ghosts count double—for what they were and for what they are. Somehow there were no ghosts at Poynton,” Fleda went on. “That was the only fault.”

Mrs. Gereth, considering, appeared to fall in with the girl's fine humor. “Poynton was too splendidly happy.”

(248-50, original emphasis, underlined emphasis added)

生命、生活、敗北と喪失、女性性、幽霊、侘しさ、簡素な日常品、Poynton と対比されるこれらの布置の星座が暗示するは何か。

ニュー・ヨーク版の序文で、大量生産工業品が溢れた世で、労働者がより多くの労力を注いだ手工芸の骨董が珍重されるその時代を、James は「物狂いの時代」と評する (ix)。この彼の認識には、美術工芸品と人間の日々の営みの再統合を目指した美術工芸運動を提唱した William Morris や彼に影響を与えた John Ruskin 等の影響が既に指摘されている。若き折、Morris 邸を実際に訪れ感銘を受けた様等、Morris 及び Ruskin に James は度々、言及する (“The Poetry of William Morris,” *Notes of a Son and Brother* 438)⁽⁶⁾。当時、洗練された調度品への人々の関心の背景にあるのは、美への人間のライフ（生活・人生）の再統合である。Mrs. Gereth の観念的な美の具現化である Poynton も、これに一部、通底するのかもしれない。

他方、ライフの中の物というテーマでも、Poynton 邸と対比されるのが質素な日常品から成る Ricks 邸である。そこでは物は道具として、時の流れの中で、人間のライフに（スポイルされて現在は Poynton にある骨董品のかつての本来の姿の様に）の有機的に統合されている。ゆえに、その簡素な日常品は亡きその所有者を偲ばせる。平凡で質素な人生を、故人はひっそり生きた。二人はその霊を感じる。Ricks 邸の侘びた佇まいは、物質的

(6) 示唆的なことに、芸術復興運動にはマルクス主義の影響がある（大内）。美術工芸品を作製する卓越した技術を有する職人が、産業化社会では大量生産工場の歯車的な労働者となり果てたと Morris は嘆き、そして、解放された職人による日常の道具としての美的工芸品を通じての美と生活の再統合を志向する。美的価値への重視の有無はともかく、Marx も道具を用いた自然への関与に人間の本質を見ており、それによる人間と世界の統合を語る (128)。これは、主客の融合による主体の膨張を根底に据えるドイツ・ロマン主義思想に、殊に若き日の Marx が影響を受けていたからだとされる (Breckman)。こうした思想史の脈絡を念頭に置くと、道具としての物を媒体に、生活に有機的に統合された主客関係を重視する思想が、超絶主義と共に同作品の背景にあるのが見える。



客我として完璧な配列で有機的に、同時に超時間的な観念の次元で統合された骨董品の美ではない。時間に抗うかの如く夫人がその布置の再現を試みる Poynton の骨董品とは対照的に、時の流れの中で朽ち行く自然のその侘びた佇まいゆえに、故人の愛用品は客我としては肥大化せずその所有者と照応する。所有者を想起させながら朽ちてゆくその空間は、近代自我の基盤である主客の二元的関係の傍ら、人と物の関係の傍らに在り、「我々」という一人称複数が霊という第三の外部を内に含み込む、非人称的な場である (249-50)。日常品の所有者の面影の中で、有機性を保ちながらも非有機性へと、固有性を保ちながらも非個性へと到る。Ricks 邸の侘びた物そのもの次元において、近代心理小説の大家と目される James の小説に、近代的自我とは異質な非人称的な空間が開かれる⁽⁷⁾。

Poynton の唯美主義的完璧さにおいては、時間は停止するだろう。対照的に、物語の終盤、敗北を契機としてその観念性が打ち破られた結果、過去に生きた故人を日常品から偲びながら、物が道具として人の生とその未来へ向けてかつて有機的に結び付いていた Ricks 邸で、二人は時間を生きることになる。普段の日常品が過去の故人と照応すれば、逆説的に一過性と希少性が放つアウラを日常品は纏う⁽⁸⁾。

James はこれを更に徹底させているように思う。このエピソードの後、Owen から蒐集品の中でも至高の逸品である “the Maltese cross” が, Fleda に秘かに贈られる。「至高の逸品を秘かに」、その言外には彼の真心がある。つまり、物と精神が正しく照応している。だが物語の最後、“the Maltese cross” を含むスポイルされた Poynton 邸の蒐集品は、邸宅もろとも炎上して燃え尽き、幾重にも剥ぎ取られ続けたその幽霊的な生を終える。骨董品は焼失する不在の記号と化すことで、過酷にも言外の真心と照応し、そして不在のその意味を埋めて行く。

6. 結び

本稿は *SoP* にみる人と物の関係性を論じた。大量生産品への拒否ゆえの当時の骨董趣味には、それを介した主客の有機的を統合への人間の希求が垣間見える。だが、時に即物に、時に美的に、人間の観念の次元でその追求は肥大化し、その結果、その統合の破綻する様を James は見ているようだ。当時の社会から疎外された女性の人生と生活、換言すればその身体性の表象でありながらも、他方で一面、時空の超越を志向する観念的美への

(7) Rowe も言うように (85-118)、James はフェミニズムにやや冷やかで、最終的には全てを失う女性達を頻繁に描く。彼の女性主人公達は、Fleda を始め自身の住居を持たず常に移動し続ける存在である。物が無いから自我を構成する物質的客我物が希薄なのだろうか、主客に基づく自我に囚われず、三人称的存在の幽霊を Fleda は見る。自由であり続けたのが彼女の成功だと、序文で James は記す (xv)。

(8) 道具を蝶番とした有機的世界の構成においてこそ、Heidegger が現存在の本来的な時間性を見出したのは、道具を介した更なる経験から、未来へと時間が開けるからである。しかし同時に、「不安」(“anxiety”) という語を以て語られる、この道具的連関が打ち破れる瞬間における、日常的な意味を剥奪された異様な様相の開示による、忘却された過去の想起と自己の存在への問いかけを Heidegger は見ている (78-148, 225-73)。

Heidegger が語る、存在への問いに際してのこの不安と対比しても、本作は興味深く思える。道具が用いた日常の生の連関とは異質な面を同様に見出しながらも、James が本作で語る故人を偲ばせる邸宅と日常品を契機として喚起される幽霊は、「三人称的に語られる」一人称複数の様相を帯びているからだ。それらの日常用具としての性質の維持が、その一因かもしれない。人間の死と物との関係性は、James にとっても重要である。“Is There a Life after Death?” にて彼は死後の生を語っているが、この考察には習慣という要素が重要だと Renee Tursi は言う。日常品という用具は、人間の習慣に不可欠な構成要素である。



追求によりスポイルされた蒐集品たる Poynton 邸の骨董品への Mrs. Gereth の執着に、それが表れる。

そして、Swedenborg の新プラトン主義的な照応思想の二元論的・観念的解釈、及びドイツ・ロマン主義を吸収した超絶主義による照応思想の一元的・有機的解釈も、同作の人と物との関係性に暗に投影されているだろう。前者は同作における人間の観念性とその破綻、及びその結果の主客統合の崩壊、後者は主客のアニミズム的・有機的統合性と並行するように思われる。

他方、Poynton 邸に対比される Ricks 邸では、その統合の破綻後のアレゴリカルな日常品が存在する。そして、それは故人の霊を喚起する。それは、身体が崩壊した後の身体性ととも呼ぶうる、生の残滓として故人を偲ばせる生活用品の、生と時の流れに浸る侘びと寂びである。

Works Cited

- Agnew, Jean-Christophe. "The Consuming Vision of Henry James." *The Culture of Consumption: Critical Essays in American History, 1880-1980*, edited by Richard Wightman Fox and T. J. Jackson Lears, Pantheon, 1983, pp. 65-100.
- Benjamin, Walter. "The Concept of Criticism in German Romanticism." Translated by D. Lachtermann, H. Eiland, and I. Balfour, *Walter Benjamin Selected Writings, Vol. 1, 1913-1926*, edited by M. Bullock and M. W. Jennings, The Belknap P of Harvard UP, 1996, pp. 116-200.
- . *The Origin of German Tragic Drama*. Translated by John Osbourne, Verso Books, 2003.
- Boudreau, Kristin. *Henry James' Narrative Technique: Consciousness, Perception, and Cognition*. Palgrave Macmillan, 2010.
- Breckman, Warren. "Marx and Romanticism." *Critical Review: A Journal of Politics and Society*, vol. 34, 2022, pp. 28-52.
- Brown, Bill. *A Sense of Things: The Object Matter of American Literature*. U of Chicago P, 2003.
- Coulson, Victoria. "Things." *Henry James in Context*, edited by David McWhirter, Cambridge UP, 2010, pp. 321-31.
- Duban, James. *The Nature of True Virtue: Theology, Psychology, and Politics in the Writings of Henry James, Sr., Henry James, Jr., and William James*. Fairleigh Dickinson UP, 2001.
- Emerson, Ralph Waldo. *Essays: Second Series*. Boston, 1856.
- . "Swedenborg, or the Mystic." *Representative Men: Seven Lectures*. 1850. The Belknap P of Harvard UP, 1987, pp. 51-82.
- Foucault, Michel. *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*. Gallimard, 1966.
- Haviland, Beverly. *Henry James's Last Romance: Making Sense of the Past and the American Scene*. Cambridge UP, 1997.
- Heidegger, Martin. *Being and Time*. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson, Blackwell, 1962.
- James, Henry. "The Altar of the Dead." *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 17, Charles Scribner's Sons, 1909, pp. 3-58.
- . "The Bench of Desolation." *Complete Stories 1898-1910*. The Library of America, 1996, pp. 847-95.
- . "Emerson." *Henry James: Selected Literary Criticism*, edited by Morris Shapira, Cambridge UP, 1981, pp. 68-86.
- . "The Ghostly Rental." *Complete Stories 1874-1884*, The Library of America, 1996, pp. 157-90.
- . *The Golden Bowl*. Vol. 1, The Floating P, 2010, 2 vols.
- . *Hawthorne*. Macmillan, 1909.
- . "Is There a Life after Death?" *Henry James on Culture: Collected Essays on Politics*



- and the American Social Scene*, edited by Pierre A. Walker, U of Nebraska P, 1999, pp. 115–27.
- . “The Jolly Corner.” *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 17, Charles Scribner’s Sons, 1937, pp. 433–84.
- . *Literary Criticism*. Vol. 1, edited by Leon Edel and Mark Wilson, Library of America, 1984.
- . *Notes of a Son and Brother*. Macmillan and co., limited, 1914.
- . “The Poetry of William Morris.” *Views and Reviews*, The Ball Publishing Company, 1908, pp. 63–82.
- . *The Portrait of a Lady*. Vol. 1, Charles Scribner’s Sons, 1937.
- . “The Romance of Certain Old Clothes.” *Complete Stories 1864–1874*, The Library of America, 1996, pp. 243–62.
- . “The Spoils of Poynton.” *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 10, Charles Scribner’s Sons, 1909, pp. 1–266.
- James, Henry, Sr. *The Secret of Swedenborg: Being an Elucidation of His Doctrine of the Divine Natural Humanity*. Boston, 1869.
- James, William. *The Principles of Psychology*. Vol. 1, Macmillan, 1890.
- Kristeller, Paul Oskar. *Renaissance Thought and its Sources*. Columbia UP, 1979.
- Marx, Karl. *Capital: A Critique of Political Economy*. Edited by F. Engels, translated by S. Moore and E. Aveling, vol. 1, Progress Publishers, 1887.
- Meissner, Collin. “Talking about Money: Art and Commerce in America.” *Palgrave Advances in Henry James Studies*, edited by Peter Rawlings, Palgrave Macmillan, 2007, pp. 263–82.
- Nozaki, Naoyuki. “A New Materialist Reading of Taste in Henry James’s *The Spoils of Poynton*.” *The Journal of the American Literature Society of Japan*, vol. 2019, no. 18, 2020, pp. 55–73.
- Rowe, John Carlos. *The Theoretical Dimension of Henry James*. U of Wisconsin P, 1984.
- Sarris, Fotios. “Fetishism in *The Spoils of Poynton*.” *Nineteenth-Century Literature*, vol. 51, no. 1, 1996, pp. 53–83.
- Savoy, Eric. “The Jamesian Thing.” *The Henry James Review*, vol. 22, no. 3, 2001, pp. 268–77.
- Swedenborg, Emanuel. *Heaven and Its Wonders and Hell: From Things Heard and Seen*. 1758. Philadelphia, 1892.
- Taylor, Andrew. *Henry James and the Father Question*. Cambridge UP, 2002.
- Tursi, Renee. “Henry James’s Self-Reiterating Habit in ‘Is There a Life After Death?’.” *The Henry James Review*, vol. 23, no. 2, 2002, pp. 176–95.
- Wynne, Deborah. “The New Woman, Portable Property and *The Spoils of Poynton*.” *The Henry James Review*, vol. 31, no. 2, 2010, pp. 142–53.
- 大内秀明. 『ウィリアム・モリスのマルクス主義』. 平凡社, 2012.
- 町田みどり. 「『ポイントンの蒐集品』における「もの」とひとの関係」. 『ヘンリー・ジェイムズ、いま：歿後百年記念論集』, 里見繁美他編, 英宝社, 2016, pp. 189–207.
- 松浦恵美. 「『もの』と『自由精神』: *The Spoils of Poynton* における倫理」. 『英文学研究支部統合号』, vol. 7, 2015, pp. 65–72.
- 山口志のぶ. 「Henry James, *The Spoils of Poynton*—“The House Beautiful” をめぐる美しき戦い: フリーダとジェイムズの再生」. 学習院大学英文学会誌, 2006, pp. 83–97.



Title : “Living a Shorn Life : On the Relationship between Men and Objects in Henry James’s *The Spoils of Poynton*”

Hidetaka Kamo

This essay, “Living a Shorn Life,” analyzes the relationship between human and objects in Henry James’s *The Spoils of Poynton*. The essay discusses how objects have played a symbolic role in the work, offering two major critical perspectives. One perspective views objects as abstracted and interpreted as fetishism in consumer society and imperialism, while the other is a phenomenological approach that understands the relationship between men and objects based on human life.

The essay examines how the organic integration of men and objects has been lost and analyzes how the characters become obsessively attached to objects. In particular, it shows how Mrs. Gereth’s projection of her self onto antiques drives the story forward and how the relationship between men and objects collapses as these collectibles are portrayed as spoils. The essay also points out how the obsession with objects intersects with capitalism and imperialism, and how the influence of Swedenborgian thought, studied by James’s father, is reflected in the work. In contrast, the modest atmosphere of Ricks and the relationship between the departed and her belongings, which evoke memories of the dead, is thoroughly explored to highlight the difference from the former.

This essay demonstrates that *The Spoils of Poynton* goes beyond the mere inheritance of antiques, reflecting broader social issues, and explores how the relationship between men and objects reflects James’s awareness of his time.

